

## 職員リレーエッセイ

## 「ありがとう」を贈ろう

ヘルパーステーションわははサービス提供責任者 井上英也

昨年末になりますが、ヘルパーさんから1冊の本を頂きました。

「ありがとうの本 2018」この本は、10代から80代の幅広い年齢層の方が、今伝えたい方へ感謝の言葉を綴った短編集で、読みやすく、気持ちがほっこりします。

「ありがとう」、この言葉は福祉業界で働く人であればよく使う言葉ですが、贈る相手が身近な両親や妻や子だったり、会社の部下やライバルの同僚であったりすると、意外に照れくさく、思ってもなかなか口に出せない言葉ではないでしょうか。

私が今、「ありがとう」と伝えたい方、それは103歳になるおじいちゃんです。おじいちゃんは、私が小学生の頃からすでに背中が曲がっていたため、よく「跳び箱だー」と言って丸まった背中の上を飛び越えて遊びました。また電話ではいつも最初に、「もしもし、こんばんわ、お風呂入りましたか、ごはん食べましたか」とどちらが早く言えるか競争。なぜこんなことが始まったかは覚えていないのですが、それは今でも続いています。もう47歳になる私ですが、おじいちゃんの前では子供に戻る不思議な感覚があります。

そんなおじいちゃんですが、今から5年程前に長く連れ添った伴侶とベーチェット病という難病を患った息子を次々亡くし、98歳にして一人での生活が始まりました。名古屋のように福祉サービスが充実しているわけではなく、いわゆる「こんなところにぽつんと一軒家」みたいなところでの生活です。心配した私の両親も、同居や老人ホーム、遠く離れたデイサービスなどを誘うも何故か首を縦に振りません。すると母がある日こんなことを言ってきました。「おじいちゃん、最近、昼間に新聞の一面のコラムの書き写しを始めてね…」100歳間近にしての驚きもありましたが、認知症予防に写経の書き写しは聞いたことあるけどなぜコラム？と思った私。するとその答えはしばらく経ってから分かります。

突然一通の手紙が私の娘に。差出人はおじいちゃんです。ひ孫への手紙。社会情勢も盛り込まれたしっかりとした文面、力強い筆圧。それはきっとコラムのおかげ！？その時から二人の、半年に一回ペースの文通が始まりました。昨年末に届いた手紙では、「寒い日が続いて、家の前は雪で真っ白・・・もうすぐ受験ですね。勉強頑張ってください。終わったら田舎にも帰ってきてください」と。するとすぐに娘も返します。「大きいおじいちゃんお手紙ありがとう・・・大好きなお餅をのどに詰まらせずに元気でいてね。」と。そんな二人を見ていると、メールやLINEの時代、親はついその使い方のみを気にして、心温まる手紙の良さを伝えていないことに気づかされます。

そんなおじいちゃんですが、今年の2月、肺炎を患い入院。気弱になったおじいちゃんは、入院するとき私の母に、「新聞はもう書けんから止めてくれ」と言ったそうです。幸い肺炎の症状は軽く、ただもう少し暖くなるまでは入院しようということになり、すると今度は母に、「暇だからまた新聞を頼んでくれ」と伝えたそうです。

今日も病室でコラムを書き写しているのかなあ。ちなみにひ孫は私のところ以外に5人います。当面の目標は来年小学生になるひ孫への手紙。大切なことをたくさん教えてくれるおじいちゃん、本当に「ありがとう」。